

「夏休み」

川上弘美

原田さんの畑で梨をもらっていると、足もとを小さなものが走りまわった。

「あれっ、出たか」原田さんが言うので気がついたのである。白い毛が生えている。三匹いる。

「ときどき出るんだよ」原田さんは言って、出荷用にならないくず梨を地面に置いた。三匹のうち二匹がやってきて、齧^{かじ}りついた。どれも梨の倍くらい大きさである。二匹は、ざくざく梨を齧りとっていく。しかし三匹めはいつまでたっても動かなかった。

「ほれ」原田さんは木から梨をもらいで、三匹めの前に置いた。三匹めはそれでもじっとしていた。震えている。

じきに原田さんは出荷用の箱を取りに行った。梨の選別をしながら見ていと、かぶりついた二匹は見る間にくず梨をたいらげて、原田さんが木からもいだ梨に取りかかる。三匹めはまだ震えていた。動こうとしない。

「こいつ、だめ」という声がして、驚いた。活発に齧っている二匹のうちの片方が、声を発したのだった。

「こいつだめ」「なかなかだめ」「梨おいしいのに」「梨大きいのに」

そんなことを、甲高い声で喋る。

原田さんが箱をかかえて戻ってきたので、聞いてみた。

「たまに出るの。なんだか知らないけど、梨につきものみたいよ。じきに消えちゃうからほっとけばいいよ」そう答える。

喋るんですよ、とわたしが言うと、原田さんは面倒くさそうに頷いた。

「喋るけど、それだけだよ」そう言って、選別した梨を箱に詰めはじめた。

一日の作業が終わってから、まだ足もとをうろろしている三匹のうちの一匹を掌に載せてみた。あたたかい。疲れた掌が伸びていくような感じがする。持つて帰ってもいいですかと聞くと、原田さんは目を丸くした。

「どうするつもり」

別に、ただなんとなく。答えると、原田さんは肩をすくめたが、それ以上何も言わなかった。梨を食べようとしな一匹を掌で包んで、部屋まで歩いた。あとの二匹は跳ねながら後をついてきた。

夕食の残りをやっても食べないので、また梨をやった。勢いよく梨に取りつく。皮ごと食べる。こんどは三匹めも梨に齧りついた。三匹とも、ものすごい速さで梨を削っていく。あつという間に六個の梨が食い尽くされた。

「梨」「梨もつと」「もつともつと」

活発な方の二匹が騒ぐので、さらに梨を置いた。引っこみ思案な一匹は、もう食べようとしな。食いちらすさまを見ながら、湿布を背中に貼った。原田さんの梨畑で働きはじめてから、十日ほどが過ぎた。

このところ、夜になると何かがずれるようになったのである。何がずれるのか、時間がずれていくような気もしたし、空気がずれていくような気もしたし、音がずれていくような気もしたし、全部ひっくるめてずれていくのかもしれない。それで、昼間梨畑で働かせてもらうことにした。

手をさし出すと、引っこみ思案の一匹が登ってきた。肩まで来て、首すじをさわった。白い毛の生えた小さな手でさわった。さわりながら、喋りはじめた。

「ぼくだめなのよ」息が首すじに当たる。

「ぼくいろいろだめなの」そう言って、からだを縮こまらせる。

何がだめなの。聞くと、ぺらぺら説明しはじめた。喋りはじめると思いがけず饒舌なのだった。

「だって梨食べちゃうと梨なくなっちゃうのがだめなのよ」「動くとぼくが減っちゃうのがだめ」「時間がきてまっくらになっちゃうのがだめ」「もっと時間がたつと明るく変わるのもだめ」「ぼくが入ってもぼくが抜けてもその場所が変わっちゃうのがだめ」

いろいろと熱心に説明するのであった。

活発な二匹は追加の梨をきれいにたいらげて、床にあおむけに寝そべった。そのうちにぐうぐういびき鼾をかきはじめる。ねむくないの、と、起きている一匹に聞くと、首を横に振った。

「ここで起きてていい？　いつまでもここで起きてていい？」そう言う。いいよいいよと答えると、肩から下りて机の上にちんと座った。食事のあとかたづけをする様子を眺めている。

食器を洗い終えてから見ると、眠っていた。あとの二匹よりよほど大きい鼾をかいて、ぐっすりと眠っていた。

翌朝梨畑に行く支度をしていると、三匹は玄関の方へ走っていった。暑くなりそうだった。玄関の扉を開けると、われがちに飛び出した。こうして三匹まとまっていると、どれが引っこみ思案の一匹なのか、区別がつかない。汗をふきながら、わたしは梨畑まで歩いた。三匹は足もとを先になり後になりしてついてくる。小さな高い声で何やら喋りあっているが、よく聞きとれない。

一日梨をもちだ。原田さんは午後からやってきて、薬を撒いた。三匹は薬を撒く間梨の幹に登って、原田さんの手もとなぞをじっと見ている。

「どうだったね」原田さんが聞いた。

どう

「持って帰って、なんかあったかね、そいつら」

ただ梨を食べて眠っただけです。そう言うとき原田さんは笑った。

「今日はもう置いていたら」原田さんが言ったとたんに、三匹はきいきい騒ぎ始めた。

「やだ」「やだやだ」「帰る」「家帰る」「家で眠る」

原田さんはまた笑った。

「すっかりその気になられちゃったじゃないの」そう言いながら、ホースに取りつけた真鍮の棒の先から薬を地面に撒いた。蟬が激しく鳴いている。原田さんは首にかけて手拭いで汗ふいた。

この三匹、何なんですか、そう原田さんに聞こうと思ったが、三匹を目の前に聞くことはためらわれた。原田さんは薬を撒き終えると、水道の蛇口の下に頭を突きだし、頭から水をかぶった。掌に何杯も水をすくって、ごくごく飲んだ。じきに夕方になる。こうもりが低いところを飛んでいた。三匹は、こうもりに向かって意味のわからないことを叫んでいる。じだんだを踏んだりしている。

作業が終わると、原田さんはいつもよりたくさんくず梨をくれた。これも食べるというよ、そう言って、とうもろこしと茄子もくれた。

部屋に帰り三匹に梨をやった。原田さんにもらったとうもろこしをゆでてやってみたが、梨以外は食べない。活発な二匹は昨日よりも慣れた様子で、戸棚に駆けのぼったり電話をとって耳につけたりしていたが、やがてことんと床の上で眠った。引っこみ思案の一匹は目を大きく開いて机の上に座っている。

ゆうべはけっこう軒かいてたよ、とわたしが言うと、怒った顔になった。

「そんなこと恥ずかしいから言わないで」「軒のことはいいよ」「いいよ」

何回でも、いいいいよと怒る。少しうっとうしくなった。夜が遅くなるにつれて、ずれる感じがやってきた。梨畑で働きはじめてから寝つきがよくなっていたのに、三匹が来たおかげで興奮しているのだろうか、眠ることができず、いつもよりひどいずれがやって来る心もちになっていた。これはいけないと食器をみがいたりしたが、やり過ごせないようだった。外に出て、梨畑まで歩くことにした。

起きている一匹がついて来る気配を感じた。暗いのとずれるので、実際にそこに一匹がいるのかどうか、よくわからない。速く歩いた。空気は昼の熱気を残して、なまぬるい。夜の中で、自分の影がいくつも重なってくるような感じだった。

畑に着いて、土を掘った。暗さに少し慣れて、一匹がついてきているのがはっきりと見えた。月の光が白い毛を照らしていた。鍬を振りおろすたびに、一匹は、びく、と身を小さくした。

えい、と力をこめて土を掘った。えい、えい、と力をこめて掘った。

「どうしてそんなに掘るの」しばらくしてから一匹が言った。何も答えずに掘りつづけると、また同じことを聞く。黙っていると、何回でも聞く。あまり何回も聞くので、あっち行け、と怒鳴った。

「あ」という口のかたちをして一匹は見上げ、それから身を翻して、夜の中に消えた。

翌日もその翌日も、引っこみ思案の一匹は帰って来なかった。梨畑でわたしは

いつもよりも熱心に働いた。残った二匹は、毎日梨の木の間をくるくると走りまわった。日が暮れて仕事が終わると、二匹と一緒に部屋に帰った。二匹はあいかわらずどっさり梨を食べた。もう一匹はどうしてるんだろうね、と話しかけると、二匹は無頓着に答えた。「さあ」「さあね」「そのうち帰るよ」「帰る帰る」「どっかで泣いてるかも」「泣いてるかも」

三日たっても四日たっても、一匹は帰らなかった。ますます熱心に働くので、原田さんは日給を多くしてくれた。

「もう少しゆっくりしていいんだよ。植物は同じ速さでしか育たないんだよ」などと言いながら、日給を千円増やしてくれた。

「そういえば二匹しかいないじゃない」原田さんが言うので、わたしは下を向いた。下を向けば、活発な二匹が走りまわっている。原田さんはそれ以上聞かなかった。

「一日くらい休んだら」

休まないでいいです、休むと梨も手に入らないし。答えると、原田さんは、

「すっかり保護者だね」と言って、笑った。二匹はものすごい速さで走りまわっていた。

真夜中に、突然目が覚めた。胸が重苦しかった。カーテンの隙間から月の光が射しこんでいる。二匹は床に寝そべっていた。部屋の中のものゝ輪郭がいやにはつきりしている。電気の傘や梨の入った籠や机の上の空瓶が、輪郭だけになったように見える。胸がひどく重い。

心臓のあたりに手を当てようとしてさわると、そこに何かがあった。飛び起きると、いなくなっていた一匹らしいのが胸から跳ね下りた。

え、とわたしが声を出すと、一匹は枕にかじりついた。

「ただいま」「帰ったよ」「怒ってる？」「まだ怒ってる？」

そっと抱き上げて、小さな顔に頬ずりしてみた。一匹はおとなしく頬ずりされている。生えている白い毛が触れて、くすぐりたい。

「怒ってないのね」「よかった」「ごめんなさい」「ごめんなさい」

何回でも、ごめんなさいを繰り返す。ぜんぜん怒ってないよ、と答えると、はこべの葉くらいの大きさの指でこちらの頬をぽんぽんと叩く。こっちこそごめん、わたしが言うのと、もう少し強く叩く。

「ちよっと悲しかったよ」「ちよっと泣いてたよ」

言いながら、しきりに叩く。叩くにまかせていると、だんだん遠慮のない強さになってきた。痛いよ、と言うと、叩くのをやめてささやいた。

「おなかすいたよ」「梨ちょうだい」「梨」「梨」

梨の籠を指さすと、ひと飛びで籠に取りつき、勢いよく梨を食いちらかしはじめた。

「そろそろ」と原田さんが切り出したのは、八月が終わる頃だった。

「最盛期は終わるんでね、わし一人で足りるさ。苺の時節までは少し間があるよ」

原田さんは梨の幹に寄りかかって、煙草をふかした。走りまわる三匹を、目を細めて見ている。

「まだ生きてるかね」と原田さんは言った。わたしがはじかれたように顔をあげると、反対に原田さんが驚いた表情になった。

「あれ、言わなかったっけか。シーズンが終わると消えるんだよ、これ」

昼間なのに、ずれるような気がした。立っている自分から、そっくり同じ大きさの自分がひよいと出て、そのままどこかに歩いていってしまいそうな気がした。

「だからさ、虫みたいなもんなんだって。かぶと虫、飼ったことなかった？ 夏が終わると死んじゃうでしょ。それと同じ」

空き缶のふちで煙草をもみ消しながら、原田さんは走っている一匹を軽く蹴った。蹴られて、一匹はぽんと跳ねた。それが面白かったらしく、自らぽんと飛び上がった。ほかの二匹も真似してぽんぽん飛び上がる。

「気にすることないよ、そういうものだから」そう言って、原田さんは出荷用の梨の箱から、特に大きくて汁のたっぷりありそうなのを十個ほどより出してくれた。

「あげるよ。よかったらまた働きにきてね。助かったよ」

最後の日給をもらって、帰った。部屋に着いて封筒を開けると、いつもより三千円多く入っていた。梨を床に置くと、三匹はわらわらと走り寄った。汁を毛にちらしながら、三匹はもりもり梨を食べた。

夜、激しいずれがやってきた。いつものような微妙なずれではなく、昼間原田さんのところで感じたような、ひどいずれだった。空気や地軸がずれる感じではなく、からだ全体がすっぽり抜けてしまうようなずれだった。

抜けて、からだの横に立ってしまった。寝ているからだのまわりを、三匹が跳ねまわっていた。早い時間に軒をかいて寝ついた三匹のはずだったが、真夜中に、元気に跳ねまわっていた。

「行こ」「行こ行こ」「梨畑」「梨畑梨畑」

くちぐちに言って、そこに横たわっているからだを揺すっている。

もう出てしまったよ、ここに立っているよ、声をかけると、三匹そろって見上げた。

「出たね」「出た出た」「行こ」「行こ行こ」

三匹いっぺんに足によじのぼってくる。ドアを指し示す。横たわっている自分のからだを残したまま、三匹を肩に乗せて外に出た。夏の空気が、からだの横を重くゆっくりと流れていく。梨の木が等間隔で夜の中に立っていた。

「行こ」「行こ」「早く早く」

活発な二匹がいっぺんに地面に飛び下りた。二匹はすばやく梨の木に登って、いちばん高いところに取りつき、じっとした。引っこみ思案の一匹は、まだ肩に乗っている。行かないの、と聞くと、首を横に振った。

「ぼくだめなの」「こわいの」「こわい」「だめ」

木に取りついた二匹は、木守りの梨を齧りはじめた。いつものようにがつつ食うのではなく、静かに味わうように齧っていた。肩に残っている一匹に向かって、行かないの、ともう一度聞いた。

「だめ」「ぼくだめだよ」「ぼくがぼくじゃなくなっちゃうのがだめなのよ」

だめなのなら、部屋に戻ろうか、そう言うのと、黙った。

戻らないの？ 聞くと、今度は首を縦に振った。

じゃあどうするの。

答えない。活発な二匹は、木守りの梨をすっかり食べ終えていた。幹にぴったりとついた二匹の姿は、梨の木にできた白い瘤のように見えた。

からだが軽かった。先ほどよりもますます軽くなっていた。油断していると、真空に引きこまれるように、どこか知らない場所に引きこまれて戻れなくなっ

しまいそうな感じだった。肩の一匹は震えている。最初に見たときと同じように、震えている。震えが伝わる部分があたたまつて、ゆるんでくる。肩から胸から腹から腕から足まで、次第にゆるみはじめる。湯に入っているようだった。

「奥の木まで一緒に行つて」

一匹が言うので、肩にのせたまま歩いていった。一匹は僅かにためらったのち、肩から幹に飛びうつり、急いで木守りの梨を食べはじめた。先の二匹に追いつこうとするように、急いでがつがつ梨を食べた。いつもと同じように、何も考えていない顔で食べた。

「まだぼくだめだよ」食べおわると、こちらを向いて、言った。

だめなのなら、ふたたび言いかけて、やめた。だめなのは、自分も同じだった。よその生き物に、だめなのなら、などとは言えなかった。

「だめだけど、行くね」五分ほどの沈黙の後に、一匹はいやに真面目な表情で言った。ちまちまとした口や鼻や目が、月の光に輝いていた。

もう行くのかと、心細くなった。取り残されることがひどく心細かった。行かないで、と口走りそうになった。

「じゃあね」そう言うと、一匹は静かに目を閉じた。それから見る間に瘤になつてしまった。梨の木の白い瘤になつてしまった。瘤をさわってみたが、もう動かなかつた。ああ瘤になつてしまったと思ひながらさわっていると、ますますからだは軽くなって、瘤の中に吸いこまれるような心もちになった。

吸いこまれる。そう思った。連れていかれる。

その瞬間、反射的に瘤を叩いていた。瘤から身を遠ざけようとしていた。行くよ、という一匹の声が聞こえたような気がしたが、いやだいやだと叫んでいた。叫んだとたんに、からだは重さというものをなくして、凄く速さで部屋に飛

んで帰った。

部屋で寝息をたてているからだに戻った。

汗をびっしょりかいていた

翌日わたしは原田さんを訪ねた。いつもの野良着ではなく、町に行くような服装で訪ねた。原田さんは「おっ」というような声を出して、茶をふるまってくれた。

雇ってもらった礼と、他の仕事を探すつもりであることを告げて、茶を飲んだ。

「もうすぐ二百十日だね」原田さんは煙草を吸いながら、空を見上げた。

「いっぱい遊んでた子供が見えなくなったと思ったら、宿題でもしているのかねえ。夏休みじゅうためた宿題、最後の方でまとめてしているのかねえ」

原田さんはそんなことを言って、しきりに空を眺めている。

帰りがけに梨畑を通ったが、どの木に白い瘤がついているのか、もうわからなくなっていた。

いろいろありがとう、と口の中でつぶやいて、わたしは梨の木の本をとんとん叩いた。走りまわる三匹が視界をよぎったような気がしてふり向いたが、何もいなかった。小さなとんぼが、低いところをすいすい飛んでいる。もう一度だけ、梨の木を撫でてから、わたしは歩きはじめた。